

早いもので、2011年を振り返る師走となりました。昨年のこの時期も同じタイトルで巻頭言を作成しておりましたが、タイトルをつけるにあたり、3月11日に発生した東日本大震災のことを避けては通れません。被災地の皆さんは現在も「これまでの当たり前前生活」とは異なった生活を送られています。被災地の方々のコメントや震災直後から続く支援体制から、日々の生活が人と人との絆や人と生まれ育った土地との絆に大きく支えられていることを再認識します。かつての日々の生活を取り戻そうとするなかで、学校が果たす役割について、本学の学生たちと議論した内容をご紹介します。

本学では教職を志望する学生を対象に、センター所属の教員が「教職サークル」を担当しています。週に一度集まって、「英語教育法」や「時事問題」等について各グループが活動を継続しています。私は2011年度前期に7人の学生とグループを作り、「新聞記事にみられる学校問題」について活動を継続しました。学生が自分のアンテナに触れた新聞記事を持ち合い、議論したいポイントに参加者全員にプリントを配布で指示した上で、全員で議論を進めるスタイルです。

グループの一人の学生が選んだのが、6月の朝日新聞の記事です。「間仕切り教室不便に学ぶ」というタイトルで、岩手県大槌北小学校が体育館をパネルで区切った空間で授業を展開していることを報告しています。あげられている懸念事項は、

- ・パネルの仕切りだけなので、音が問題になる
- ・それに伴って「音読」活動に遠慮をしてしまう
- ・騒がしいなかで教えたことが身につくのか心配である

などです。

その「あたりまえとは違う授業形態」から生徒が学んだことは

- ・声が邪魔にならないように黒板の位置をかえる
- ・話し言葉のボリュームをコントロールできるように「声のものさし」を作る
- ・声だけでなく、口を大きく動かして、言っている内容を伝える

などがあげられていました。

記事中の表現を借りると、「静けさって当たり前だと思ってたけど、ありがたかったんだね」、これまでの私たちは静かな学校が「共有前提」であったと思います。まず、その点を認識することから私たちの議論はスタートしました。次に、英語という教科の特性、つまり「発音指導では音を通さないと授業が成立しにくい」状況になったときに、どのような工夫が必要か？について意見を出し合いました。掲示物などでフォローしながら、声のボリュームをコントロールするというアイデアが出ました。また、教室や教員の確保が通常よりも難しい状況では、社会科と連携して「世界で使われている英語の」という課題や家庭科と連携して「料理スタイル、食事形式の紹介」という課題で授業を展開できる可能性について議論が展開しました。

彼女らが実際に教壇に立ったときに、困難の中で教育を継続する意義とその方法についての議論から得た授業・学校運営のアイデアを一步ずつ実践してくれることを願います。